



教皇様の聲

Libreria Editrice Vaticana,
Città del Vaticano の転載許可済
発行所 © 1988
財団法人 精道教育促進協会
〒659 兵庫県芦屋市船戸町12-6
☎(0797)31-3452

多様性は真理の豊かさに通じる



みなさん方が受け継がれた伝統の価値を十分に理解するためには、カトリックの大学生活の起源を思い起こしてみる必要があります。私たちが知っているような大学が教会との密接な関係の中で生まれたのは、偶然ではなかったのです。信仰と学問への愛は緊密な関係にあります。中世においては、教会の教父や思想家、学者たちにとって真理の追求は神の追求と関連していたからです。第一バティカン公会議でも表明されたように、カトリックの教えによれば、精神は真理を追求するのみならず、たとえ不完全ではあれ真理を把握することができるとです。

カトリック高等教育は、神の恩寵を通じて特別な「真理の協力者」(ヨハネ3・8)の育成を求めています。すべての大学同様、カトリックの大学も真理への奉仕に専念しています。しかし、その探究と教授とが信仰への洞察力と展望から出ているため、独特の豊かさがあります。

このような見地からすると、カトリックの大学と教会の教導職との間には親密な関係があります。司教は信仰の博士・教師として信仰と学問、及び啓示された真理と文化との接点における主人公であり、特権ある役割をこなしています。司教はカトリック大学の外部にいる指導者ではないのです。

近代の特徴は、思想や観点の多様性です。このため当然ながら相互理解が必要となります。社会も、社会の中の各グループも、自

分たちとは異なった考え方を尊重しなければならぬということ。しかし多様性はそれ自体のために存在するのではなく、真理の豊かさをめざすものです。学究の分野にあっては、多様性を認めるなら当然のこと、人々に対して敬意を払わねばなりません。しかし、だからと言って、何事も絶対の真理・基準とはなりえないという理由から、人間の生命や目的についての究極的な疑問に対する決定的な答えは存在しないと、かすべての信念が同じ価値を有するとか主張することはできません。真理はこのように扱われるべきではないのです。

どの時代の文化もある曖昧さを含んでいるのは確かで、これは人間の心の内面、すなわち善と悪との葛藤を反映しています。福音は文化との絶え間ない出会いにおいて、つねに時代の作り上げたものとその思い込みに挑まなければなりません。(ローマ12・2参照) 現代にあってはこの曖昧さはしばしば社会にとってあまりにも破壊的であり、人間の尊厳と対立するので、福音が文化を浄化し、高揚させ、真に人間的なものへの奉仕に導くことが重要なのです。

人類の存続そのものがこれにかかっているからです。(…)

神学は教会全体に奉仕するものです。神学の役割の一つに様々な信者の間の相互作用をはかることがあります。司教は教皇と一致してキリストの教えを正しく伝える使命をもつと同時に、牧者として神の民全体が同一の信仰とキリスト教的な生活において一致するよう導かなければなりません。これを行なうにあたってカトリック神学者の協力が必要とされ、彼らは教会に測り知れないほどの奉仕を行なっています。しかし神学者もまた、キリストがまざりローマ教皇に、そして司教たちに与えた神の恩寵(カリスマ)を必要とします。教会生活の営みを豊かにするために、神学者の仕事は最終的に教導職により検討、確認されなければ

ばなりません。要するに、カトリック神学は学問という場であっても教会という環境の中にあるので、特別な性質と価値が与えられるのです。

ここで、聖霊の賜に関する聖パウロの言葉は私たちがみなにとって光と調和の源となります。「霊的な賜は異なるが霊は同じである。務めはいろいろあるが主は同じである。働きはいろいろあるがすべての人にすべてを行なわれる神は同じである。おのおのの霊の現われが与えられるのはみな利益のためである」。(コリント①12・4-7) 教会の様々な務めや働きにおいて、権力や支配権が分割されているのではなく、同じキリストの神秘体への奉仕を各々の召し出しに従って分かち合う、つまり、奉仕における一致が問題となるのです。(一九八七・九・十三)

《復活前夜》

キリストは死を死に至らしめる

1 「御父の光栄によってキリストが死者の中からよみがえった」。(ローマ6・4)

まだ墓の中に横たわっておられる方の復活を宣言するのは早すぎるのではないのでしょうか。夜明けには婦人たちがここへやって来て、「イエズスは死者の中からよみがえられた」という言葉を聞くのです。(マテオ28・7)

2 キリスト御自身が私たちをこの前夜祭にお呼びになったのではないのでしょうか。キリストはゲッセマニで再び「あなたたちは私と共に目を覚ましていられたのか。一時間さえ私と共に目を覚ましてい

られなかったのか」と言われたのではないのでしょうか。使徒たちは、この時がどういう時であったか、またなぜ呼ばれたのかを理解できなかったようです。キリストよ、今、この教会全体が御身と共にいます。

聖パウロは素晴らしい言葉で述べています。「私たちはあなたと共に葬られた。……私たちはあなたの墓で目を覚ましてはいるだけでなく、洗礼によってあなたの死に浴している。(ローマ6・3〜4参照) 洗礼の秘跡は新しい命の始まりを意味しています。私たちは新しい命を生きることができるよう御身と共に葬られました。(同右) 実に、今夜クライマックスを迎えようとしているのは(御身の時)なのです。

3 私たちは目を覚ましています。私たちは御身と共に十字架につけられました。私たちの(古い人間)が御身と共に十字架につけられたのは、もはや罪の配下につかないためです。(ローマ6・6参照) 御身と共に「死んだ者は罪から逃れたから」です。(ローマ6・7)

昔、最初の過ぎ越しの夜、イスラエルの子供たちが見守るうちに扉が開き、小羊の血でしるしがつけられて、彼らは奴隷の境遇から解放されたのですが、その時のように私たちも自由になるのです。

神の小羊の死が浸透したその墓の、閉ざされた扉をいま私たちは見守っています。キリストはこの世の罪を取り除かれます。「キリストの死において洗礼を受けた」者は誰でも、罪から解放されます。最初の人間であったアダムから受け継いで来た罪

を振り捨てて、キリストと共に「新しい命に歩む」ことができるのです。そのために私たちは徹夜で祈りを捧げます。私たちは御身の時が有する力をよく理解していません。私たちの徹夜は単に列席するだけ、黙想するだけではありません。典礼の充滿なのです。ここに私たちは御身の死に似せた死にあって、御身と完全に一体となります。(ローマ6・5参照)

4 今夜、御身の時の終わりに、御身はまことに死を死に至らしめます。「死よ、私はおまえに死をもたらず。ですから御身の復活を通して、私たちは御身と、神の栄光に結ばれます。これが私たちからの復活前夜の祭のメッセージです。今夜、教会は全世界にこのメッセージを発表します。使徒たちの例にならって、また地上のあらゆる場所において、宣言します。

5 あなた方に大いなる喜びを伝えましょう。「アレルヤ、主をほめたたえよ。復活前夜の「アレルヤ」なのです。夜明け前に墓へやって来た婦人たちは、石が墓から転がしてあるのを見、主はよみがえられた」という言葉を聞きます。(ルカ24・2〜6参照)

6 親愛なる兄弟姉妹たち、要理を学ぶ人々、今夜洗礼を受けようとするみなさん方が、この復活前夜祭に参加していることを私たちは本当に嬉しく思います。みなさんを心から歓迎し、キリストの教会の一員として受け入れましょう。「水と聖霊により」(ヨハネ3・5参照) 生まれかわろうとするすべて

の人々、罪に死に、「キリスト・イエズスにおいて神のために生き」ようと望む(ローマ6・11参照)すべての人々のために、今夜この教会は洗礼盤を用意しています。どうぞこちらへ、兄弟姉妹たちよ。みなさん方がおいでになったことを教会は喜んでいきます。そして御一緒に、泉に近づく旅人の詩を歌いましょう。「雌じかが小川

《聖木曜日》

感謝の祭儀
キリストは私たちとともにまします

7 「私に与えられた主の恵みに、何をもって報いようか。(詩篇116(115)・12)

本日聖木曜日は、ユウカリスタアの制定された日です。ユウカリスタアは感謝を意味します。感謝は恵みを認識するところから生まれます。恵みは愛のしるしです。「私に与えられた主の恵みに、何をもって報いようか。」

「過ぎ越しの祭りの前に……」(ヨハネ13・1) この夜、イスラエルの民は旧約の神ヤウエが行なわれたすべてのことを感謝し、祝ったのです。

中でも、エジプトを脱出し自由になった夜のことを彼らは記念し、心にとめていました。出エジプト記はその夜のすべての出来事を記しています。神はイスラエルの民をエジプトか

の流れを慕うように、私の魂はあなたを慕う、神よ。私の魂は神に、生きる神にかつえる。(詩篇42・2〜3)そして、「いつ私は行って、神の御顔を仰げようか」と問いかけます。

親愛なる兄弟姉妹たち、みなさん方は洗礼を受け、キリストの死に与ります。夜は明け方に近づいていきます。贖い主の時は終わりに近づきつつあります。みなさん方はキリスト

と共に新しい命に歩むため、洗礼を受けるのです。

キリストは私たちに生ける神の御顔を見せてください。キリストは父なる神の栄光によってよみがえられます。そして神を愛する人々のために神が用意された栄光を見せてくださるのです。(コリント①②・9参照) 「主に感謝せよ、主は慈しみ」(詩篇106(105)・1) (復活前夜)

ら解放し、彼らはモーゼの指示のもとに脱出しました。神は彼らを通り越した小羊によって自由にしたのでした。その夜に食するためほふられた小羊はイスラエルが選ばれたこととしるしとなりました。家々の戸口の柱と鴨居に塗られた小羊の血によって、その夜エジプト全土を襲った絶滅の災いから、イスラエルの民は確実に救われたのです。

こうして、その夜すべてのイスラエルの初子は救われ、エジプトの地の、人と獣とのすべての初子」は死に絶えました。

この厳しいしるしを目のあたりにして、エジプト人は屈服しました。イスラエルの民は奴隷の家から去ったのです。

旧約はイスラエルの民がその夜に受けとったこのしるしと、密接に結びついていきます。

これが出エジプトの夜、すなわち過ぎ越しでありました。その夜イスラエルの子らを救った小羊の血は、自分たちが選ばれた民であることを代々のイスラエル人に思い起こさせてきました。神は彼らを特別な愛情をもって遇し、すべての民の中から選ばれたのでした。

「私に与えられた神の恵みに、何をもって報いようか。」イスラエルの子孫たちは、代々その夜を祈りと過ぎ越しの晩餐とで祝ってきました。彼らは主の聖名を賛美します。賛美のために供えられたいけにえを喜び、旧約の神になされた約束と誓いの成就を喜びます。

同じ意味で、イエズスと、イエズスが使徒に定めたイスラエルの子孫とが一体となったのです。「イエズスはこの世から父のもとに移る時が来たのを知り、この世にいる御自分の人々を愛し、彼らに限りなく愛を示された。」

「ごらん下さい。イエズスが父のもとに立たれる前の最後の晩餐であった過ぎ越しの食事の際に、新しいしるし——新約のしるし——が明らかにされました。

「私に与えられた主の恵みに、何をもって報いようか。(詩篇116(115)・12)

本日聖木曜日は、ユウカリスタアの制定された日です。ユウカリスタアは感謝を意味します。感謝は恵みを認識するところから生まれます。恵みは愛のしるしです。「私に与えられた主の恵みに、何をもって報いようか。」

「過ぎ越しの祭りの前に……」(ヨハネ13・1) この夜、イスラエルの民は旧約の神ヤウエが行なわれたすべてのことを感謝し、祝ったのです。

中でも、エジプトを脱出し自由になった夜のことを彼らは記念し、心にとめていました。出エジプト記はその夜のすべての出来事を記しています。神はイスラエルの民をエジプトか

ら解放し、彼らはモーゼの指示のもとに脱出しました。神は彼らを通り越した小羊によって自由にしたのでした。その夜に食するためほふられた小羊はイスラエルが選ばれたこととしるしとなりました。家々の戸口の柱と鴨居に塗られた小羊の血によって、その夜エジプト全土を襲った絶滅の災いから、イスラエルの民は確実に救われたのです。

こうして、その夜すべてのイスラエルの初子は救われ、エジプトの地の、人と獣とのすべての初子」は死に絶えました。

この厳しいしるしを目のあたりにして、エジプト人は屈服しました。イスラエルの民は奴隷の家から去ったのです。

旧約はイスラエルの民がその夜に受けとったこのしるしと、密接に結びついていきます。

説教・講話・書簡等の抄訳



「救いの杯をあげ、主の聖名をこ
おう。」(詩篇116:13)
イエズスは杯を取られました。「食
事を終えてから杯をとり、「この杯は
私の血における新しい契約である：
…」と言われた。(コリント①11:25)
なぜここで血と言われたのでしょ
うか。
その前に、イエズスはパンを取り、
感謝したのちそれを裂いて言われま
した。「これはあなたたちのための
私の体である。」(コリント①11:23、
24)
御血は、十字架上の御受難と御死
去におけるイエズスの御体を確認す
るためだったのです。イエズスは翌
日のことをお話になりましたが、こ

の過ぎ越しの(翌日)は、全体として
この秘跡の(今日)につながるのです。
これがイエズスの御血における新
しい契約です。
これが過ぎ越しの小羊という姿の
成就なのです。
贖い、すなわち死と罪という奴隷
状態からの解放のしるしであり、終
わりの日のしるしなのです。
まことにイエズスは「私の記念と
してこう行なえ」と言われました。
(コリント①11:24) また聖パウロ
はこう述べています。「あなたたち
はこのパンを食べ、この杯を飲むこ
とに、主の来られるまで、主の御死
去を告げるのである。」(コリント①
11:26)

1 聖霊降臨の日、聖霊の御力と
光を受けて、ペトロは十字架
につけられたのち復活なさったキリ
ストについて、勇敢にもはっきりと
証言しました。「イスラエルの人々
よ、聞きなさい。…神はイエズスに
よって、あなたたちの中で奇跡と不
思議とするしを行ない、それによっ
てナザレト人のイエズスを証明され
ました。…あなたたちは彼を…：
はりつけにして殺したのです。だが
神は死の束縛を解き、彼をよみがえ
らせました。(使徒行録2・22、24)
ペトロの証言は、神が「奇跡と不
思議とするし」をもって称賛された、
救い主としてのナザレトのイエズス
の働きを要約したものと云えます。
それは使徒団のかしらペトロ自身が

2 二千年近くたった今、聖霊降
臨の日に、ペトロの後継者で
ある私はイエズス・キリストについ
ての考察を進展させ、使徒の最初の
カテケジスの内容について話さな
ければなりません。これまで(人の
子)について述べてきました。イエ
ズスは、人の子が真の神の子であり、
御子と御父が一つであることを御教
えによって知らせようとなされたの
ですが、(ヨハネ10・30参照)その御
教えには「奇跡と不思議とするし」
が伴っていました。「奇跡と不思議
とするし」は、キリストの教えの信
実性を確かなものとするため、教え
のあとに行なわれたただでなく、使

3 聖霊降臨の日にペトロが明言
した「不思議とするし」の意
味を一つ一つ分析する前に、それら
がキリストを目標とした人たちの証言
として福音書の重要な内容となっ
ていることに注目すべきです。福音書
から奇跡を取り除くことは不可能で

◆ これらの言葉は、まきれもな
く「彼らを最後まで愛された」
ことを意味しています。「最後まで」
というのは、御自身を彼らのために
捧げられるまでということ。私
たちのため、すべての人々のためな
のです。「最後まで」は、時間の終
わりまでです。イエズス御自身が再
び来られるまでです。
過ぎ越しの夜、イスラエルの子孫
は小羊の血によって、エジプトの奴
隷の家からの解放を思い起こしまし
た。そしてヤーウエへの感謝の心を

◆ 「私に与えられた主の恵みに、
何をもって報いようか。」詩
篇にあらわれるこの問いは、ある意
味でこの秘跡の秘義を表わしていま
す。この問いかけの中に御聖体があ
るのです。
(聖木曜日)

◆ 「私に与えられた主の恵みに、
何をもって報いようか。」詩
篇にあらわれるこの問いは、ある意
味でこの秘跡の秘義を表わしていま
す。この問いかけの中に御聖体があ
るのです。
(聖木曜日)

奇跡 その事実と意義 キリストシリーズ ⑪

目撃者の証言

不変の教え

す。聖書のテキストだけでなく、テキストの前後関係を分析すると、奇跡が(史実)である、すなわち、それが実際に起こったことであり、現にキリストのみわざによるものであることを証明しています。知的誠意と科学的知識をもって問題を考えれば、奇跡の部分は後世に追加された箇所であるなどと簡単に結論づけることは誰にもできません。

4

この点については、これらのできごとがイエズスの使徒や弟子たちによって証明され語られただけでなく、多くの場合、イエズスに反対する人々からも認められていたことに注目すべきでしょう。例えば、反対する人々がイエズスの行なわれた奇跡の現実性を否定していないという事実は注目に値します。反対者は「彼はベルゼブルにとりつかれた」、「悪魔のかしらによって悪魔を追い出すのだ」(マルコ3・22、マテオ8・32、12・24、ルカ11・14、15参照)などと言い、それがサタンサタンの力によるものであると決めつけたのです。しかしイエズスははっきりと彼らの矛盾を指摘なさいました。「サタンが自分に対して立ち上がって分かれ争えば、立てるところか減びてしまう」(マルコ3・26)。ここで最も大切なことは、イエズスに反対する人々でさえイエズスの行なわれた「奇跡と不思議としるし」が現実であること、また本当に起こったという事実を、否定できなかったことです。

5

次に、反対する者へではなく、洗礼者ヨハネから送られた使者へのイエズスの答えを覚えてみましょう。「来るべきお方はあなたですか、それとも他の人を待たねばなりませんか」(マテオ11・3)と尋ねると、イエズスは答えになりました。「自分の目で見聞きしたこと、をヨハネに伝えに行け。盲人は見えず、足なえは歩き、らい病人は治り、耳の聞こえぬ者は聞こえ、死人はよみがえり、貧しい人には福音が告げられている」(マテオ11・4-5)。イエズスのお答えは未来のメシアについてのイザヤの預言にふれたもので(イザヤ35・5-6参照)、イスラエルと人類の刷新および精神的治癒という意味で理解されるものですが、イエズスは一般に知られていること、そしてキリストが救い主であるしるしとして弟子が洗礼者ヨハネに報告できる事実を語られたのです。

6

ペトロが聖霊降臨の日に述べたこと、すなわち「奇跡と不思議としるし」(使徒行録2・22)については、すべての福音史家が記している出来事の一つひとつ記されています。共観福音史家はたくさんが、ときには、すべてを要約するが如き一般的な表現をも用いています。マルコの福音書には次のように記されています。「イエズスは病人を数多く治し、多くの悪魔を追い出された」(1・34)。またマテオとルカの福音書によれば、「民の中のすべての

病、すべてのわずらいを治された」(マテオ4・23)。「イエズスから力が出てすべての人を治すので……」(ルカ6・19)。イエズスがいかに多くの奇跡を行なわれたかがわかります。ヨハネの福音書には同じような表現はありませんが、福音記者ヨハネが(奇跡ではなく)「しるし」と呼ぶ七つの出来事が詳しく記されています。なぜ「しるし」を使ったのか? ヨハネは、それらのできごとの最も本質的なもの、すなわちイエズスにおける神のみわざのあらわれを、特に示したかったからです。「奇跡」という言葉を使えば、それを見聞きした人々に、できごとの(異常な)面に注目させてしまうのではないかと考えたのです。しかしヨハネ

は、福音書をしめくくる前に次のことをも記しています。「イエズスは弟子たちの前で、この本には記さなかったほかの多くのしるしを行なわれた」(ヨハネ20・30)。そしてなぜそれらを選んだか、その理由を述べています。「これらのことを記したのは、イエズスが神の子キリストであることをあなたたちに信じさせるため、そして信じてその御名によって生命を得るためである」(ヨハネ20・31)。これが共観福音書と第四福音書がともに目指すところですが、すなわち奇跡によって神の御子についての真理を示し、救いのはじまりである信仰へと導くこと。

使徒ペトロが聖霊降臨の日に「奇跡と不思議としるし」を通して証明されたナザレトのイエズスの全使命の証人となったとき、ペトロはその同じイエズスが十字架につけられたことを思い起こさずにはいられませんでした。(使徒行録2・22-24)。そこでペトロは、人類の歴史における神の救いと贖いの完全なるしるしである過ぎ越しのできごとの証人となりました。このしるしには、十字架の死という(反奇跡)と、復活という(奇跡)(奇跡の中の奇跡)が含まれていました。ともに一つの秘義に根ざしたものです。そこに私たち人間はイエズス・キリストにおける神のあらわれを深奥まで見きわめることができ、信仰によって救いの道にあずかることができるのです。(八七・十一・十一)

司祭のみなさんへ 自らではなく キリストを説く

キリストを説くために大切なことは、聖書、聖伝、教父たち、教会の教導職について深く黙想し、絶えず研究を続けることです。福音宣教は状況や人物に合わせて多様な形で表現し、具体化することができ、またそうしなければならぬからです。多様な形とはカテケジス(要理教育)であり、神の啓示に照らして現代の諸問題を吟味することでもあります。あるいは、種々の必要に応じてさらに深く研究することもあるでしょう。ただし、司祭は自分自身、もしくはイエデオロギーを説教すべきではありません。

司祭の務めとは、自らの言葉と生き方で「すべての信仰者を救う神の力」(ローマ1・16)である福音を伝えること、十字架につけられたキリスト(コリント①1・23、2・2)を宣言することであり、また、加えて、皆さん方は秘跡——特に御聖体と赦しの秘跡の役務者です。私はお願いしたい。目を大きく開いて、教会共同体の司祭である私たちの口と手とにまかされた御聖体、すなわちキリスト御自身の犠牲を祝うとは一体どのようなことであるのか、また、罪を救い、人々の良心を無限に聖なる神、真理と愛なる御方と和

解させるとはどういうことなのか、さらにキリストの御名とペルソナにおいて行動するとはいかなることであるのかを、より深く理解してください。皆さんは類なく崇高な超自然の御方のしもべです。この点からも、キリストが教会の手を通して皆さんに託された偉大な使命について、はっきり理解していなければなりません。このような要請は人間的に見て非常に困難なことでしょう。けれどもキリストは、贖いの業にふさわしい道具とするために皆さんをお呼びになりました。キリスト御自身が、皆さんに使命をりっぱに果たすための恩寵と力をお与えくださるでしょう。それでも、「うますたゆまず祈る」(ルカ18・1参照)ことが必要です。(一九八六・五・二十七)

「教皇様の声」ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説しにそのまま伝える月刊紙 毎月 十日発行 定価 一部七十円送料四十円
 ■一年予約八〇〇円送料五〇〇円 ■二十部以上の一括購入なら送料不要
 郵便振替 3-72393